小栗外傳

四

へ 13
3293
4

へ13
3293
巻 4

寒燈夜話 小栗外傳 巻之四

東都 絳山獸醜陳人戲編

第七編

三傑山猟しく両害を除く
毒婦讒毀しく孝子を逐ふ

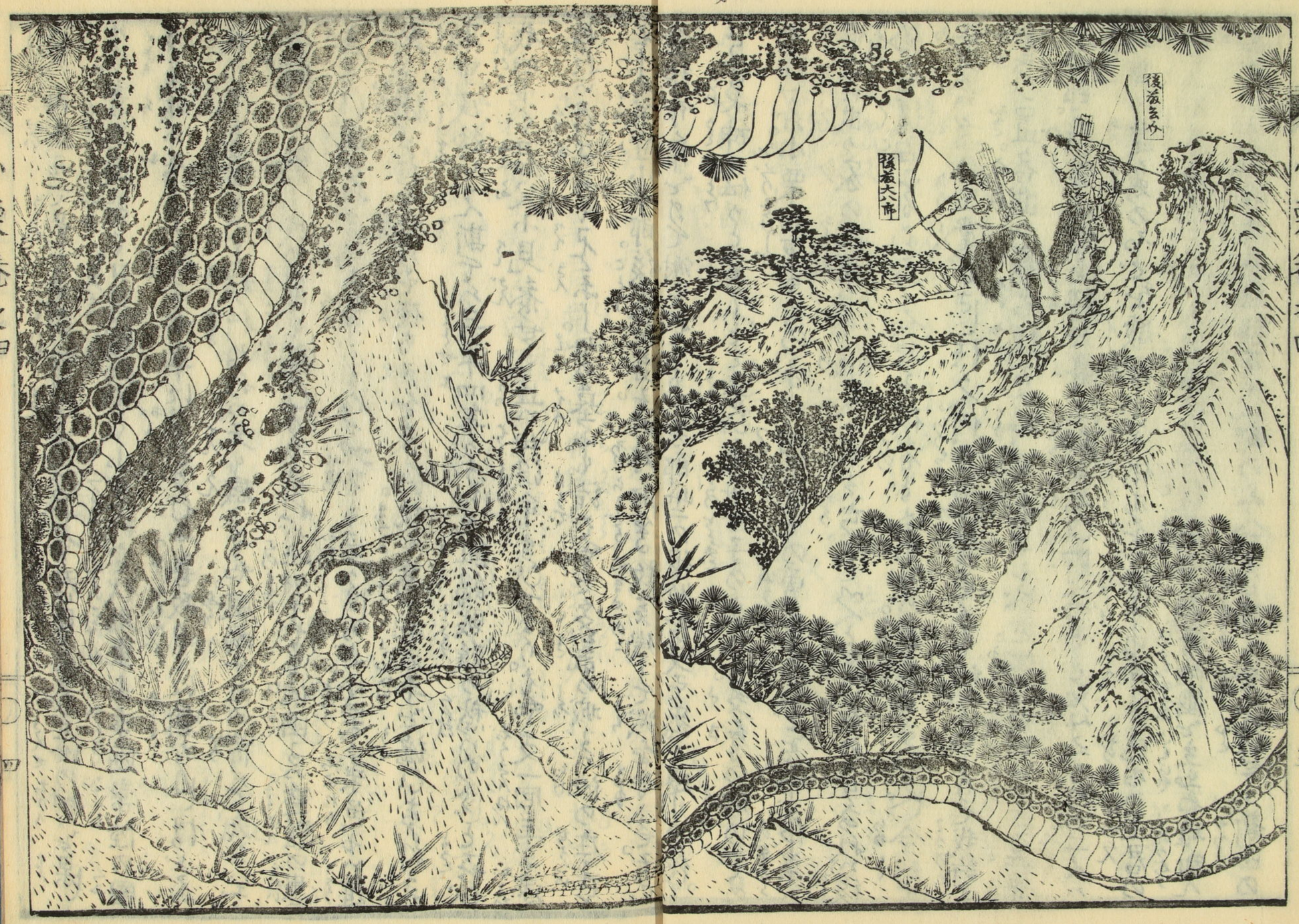
且説其日も猪ゐるなんとせ一所ふ。忽ち門外ゐ案内の声ゑへくるまば。小太郎一人の小賊をして誘引さ毋。こゝ奈何よ。前刺ゐ見しるひつる。後蔓ゐ手ゑ少そぞめりけり。三人いちよなく喜び。互に其の孫ゑ伝ふ。小左郎ゑ一人の大漢子を縛。七八人の小女を引纏ひ居れり。又後蔓ゐ手ゑ大元なる蛇の首ゑ。蔓を切て郷ゑ。二人して擔荷ひたりしば。小左郎も。後蔓ゐ手ゑ不審られぞ。其分小左郎已れ穴ゐ籾ゐ墮入しより。筑間次郎ゑ生捕ゐ至ゐて。詳らゐ詰りられば。

本大學出版部

後義はいまこれ如何にて。甚勇畧のほど感賞し。さて云へるは。我く兄殿旦下を見失ひたれば。捜索まねふせんと山谷くへけん。とある岨道にて見るふ。頻ふ鹿の音声多く。こゝ何方なるやと四方を眺望ふ細谷川を隔てゝは對ひの岨に大木の松の梢ふ鹿ぞ居こゝ。悪しき怪しやと看一看れば。いと怖しき蛇の鹿を半呑て居こゝ。思ひもよらぬ。ひとうちにうちまひうると猟矢にて。蛇を射んとまくるふ蛇這方をみて。忽ち鹿を吐きて。松の梢より頭さゝ下をさゝふ眼は二ッの鏡に似て懸こゝるが如く。口は甚に二ッ合ゝたれが如し。巨口の中より火焔うと入る舌に振動し。間近くまゝふ。岳助ひたりけゝふ猟矢を。ひきうど放ちけるふ口の中に射込ぶる。其射蛇を梢ゝりがゝと落ねれば。こゝにまたとうふ。さいなゝて忽ち谷ふこゝる。這程の岨ふ迫まる。草木を上と走る音只疾風のごとし。兄殿はこれを避んと大樹のやゝ木ある走入る。大蛇と兄殿を見失ひ楠の梢ふ上りて上下と処を。大八郎ふり逐ひ。二の矢を射ふ其矢喉よ中まり。てふ倒て大蛇弱り。なをも逐ぞ。岳助。大八郎は左右ふ別れ散くふ射こゝ行ふ。のこりて死こゝ。今日獲物なりしを。足を曳ひ引こゝ。ようとせ共蒼を引て大蛇を引こゝ牽帰んとこゝふ重こゝて磐石のごとくして。牽ふ能ふ。其頃を斬て。こゝはて掃りて寄こゝふ。ひこゝて労れば。此家ふ立寄休んとこゝれんと。蛇の首を小太郎よ見こゝふ。ヨこゝんど作り換んゝこゝが如く頭なれば。大ふ感ぜ。豫て此山ふ大蛇住こゝ。笑こゝれど。こゝとふ人ぞふこゝふ。足下兄殿容易射こゝふこゝ。勇こゝれ。此後山ふ蛇蝎の愁なこゝふ。と撫かくこゝ。其功を賞し

けり。さて斯くめぐりあふ縁べ。家に還らんと。三人各獲りのを
将て行んとすれど。山路の案内も定かに知らぬ縁べ。山賊のくま下のうち。
つゝて健やかなるたりの七八人と撰ぶ。蛇の首と紙間次郎と紙揖之助
さし。三人を七人の女子共に将て山を下りくれば。王藻瀧の下にして。小次郎
賊主紙間次郎が首を刎ひすもり。賊を対ひ汝ら今日よりこの山に
居るべからず。若此命を用ゐず。我再び山塞に入りて。一人も残さず斬殺を
ぜん。今此処より山塞に還れ。我云ふこと紙。残るものに紙伝へよと。
賊ども紙。追返さるゝ。渾畏こ跪ひて。いでや命紙背たまはんと。嵐の迷れ
ごとく。山塞さして逃げ帰りぬ。より三人を家に還す。各其父に彩と告
ぐ。小四郎も小次も喜び。擒らへし女子ども家に紙尋ねて。彩り
ぬ。其親兄弟の紙び。死せるものの蘇生せるを見て。

金銀布帛とりて酬ゆれども。小太郎些の禮物を受ず。悉く返す。彼者
ども。神に仏にと。此女子のうちに多年の郷のその
あり。小栗助重もこの紙伝へ。その勇畧のゆゑを感じ。彼輩に
男名武が家の忠臣なり。彼家一回ならずと。名家のゆゑ。後
ゆゑを復古せることあるべし。彼者ども。其家に還りぬ。今彩て
居るべき身の生業なさしむ。久何方に仕官せるも十ぶ。しかして我許に
養ひ置。名武が家名復古の村帰参さるべし。俄に使を走らし。美登
小四郎。後茂小助を招て寄す。公に貯へつゝ紙伝へ。二人に
助重が遠ゆきのゆゑを感佩す。子供ども助重の臣として。已に主君の
行方を尋ねんと。足より美登小四郎。後孫小次常陸国を主ねて誰知ん
美登小太郎。後茂兵助。後茂大八郎の三人。矢口津に命を隨せり。新田の


後藤兄弟
大蛇を殺す
山路
後義大八郎
後義太八郎

臣の再生ゐて是も又前世の縁祇ひして。今君臣となり三世の契を果し
ゐる。皆光過易く日月捜れこそ。小栗判官代助重を本國常陸の國
豪氣城ゐ居ること既ゐ七年に及びゐ。善政日に新なりしほどゐ
民の風も善ゐのこと移行ねれば。天も感じてや。風雨十五の前を失ゐ。
五穀よく熟し。民の竈も賑ひゐ。されば此付までも他國ゐ盗難の患
去ゐて民これが為ゐ苦しこゐぬる地方も多ゐしゐど。小栗ゐ乗邑ゐ道
路ゐ落ゐ物を拾ゐど。夜も戸をさゐ枕を高くして太平を謳ひまゐ。
助重民弊を又斯て三年四年がうちゐ。飢饉賊難の愁ひめゐことなび。
我旧しく君父小見参せど。且ハ母没命ゐひてより。さも支一回手ゐ逮
ねねい君父ゐも又ゐ。母の墓ゐ詣でやと多き氣の城ゐ入池の庄司と
そゐ。義登小太郎。後援兄弟その外郎等数多殘して城を守ゐ。そも
彩ハ池の庄司。風間兄弟。加藤兄弟を宗徒の人とし数十人の下僕どもし
倶ゐ鎌倉へとて発ちゐ。急ぐ旅路ゐ
永九年二月常陸を旅発
めゐざれと助重素ゐ遊紀氏好ざれば。道ゐ立寄る地方も多く。日めゐび
ちて海会ゐ到着ければ。父ゐ對面し。本國の光景を物語り。且ハ人
の良否を糺ゐしと。池さん告げ。池庄司。加賀風間の兄弟を父の
ゐ入じねれば。満重もよ郎等ゐと好ゐと喜びね。扨その後日ゐ所ゐ泰
村氏公のこゑ系ゐ入じに君も喜び。多くせ物賜ひ。助重
懇ゐ。村氏公の光景を窺ゐゐ七年ゐ。昔とハ異はして。
萬風流ゐ驕奢のこゑ人させのひきれば。公の行ゐ。憂ひ涙ゐ
と。我国ゐ思ひられど。必ず山側ゐ付ゐ。程ハ外れのゐ。
ねいられど。且ゐ年程の身ゐ。賢都ゐも畏られば。ゐ公ゐ

而已にして空しく御前をはなれしが。尚心悩しく父満重に私語けるは甚
今日は所に来り君の御光景をみるに昔に似げなく驕りしあるに
手をおかずの断てみるに。いかなる不思議の出来んも計りがたし某一言の諫
をも申上べうと思ひ侍れど。日しくらち経て。邇近の気に入ざら君の教を侵
すまじんとの畏を思へば口で止にけり。父上には齢ひとかひ重職扱て
に次げば折をりて諫めまる人有らざれば後臍を噬の愁ひあらんと生々
まる折に満重うち笑ひ我その心よりあらば既に家を枚と幾度もあらくんし。
と語るに助重喜びさてはさるべき有つるや某鈍して父上の為
慮を知らねば。さるみ言申侍ることの愚なれと喜びたりける。満重が
妾夜浪の謀て助重を悪み。いかにもして逐失ひ我子万千代に家督
嗣させんと思ひ時へ侍ることえし。故に前年助重を常陸へ下せしも。

夜浪がさしる気によりてなり。それいかにとなれば助重年少なれば盗賊を
退治させんと勧め。夫の附て是を不肖の子なりとし。尚讒言をかまへ
父家を逐出さん謀なりし。助重常陸にあると。程なく賊を平げ国よく
治りぬと聞召給ひ。鎌倉へ上りしが。今春判官代助重の十三回忌を弔らん
これ鎌倉に上りかれば此府を先んじ。判官代の行状を窺らるれ。
今日父と私語を何となく紙門を隔て立聞なれば。目今助重父におと
去るを待兼。夜浪を招きてさるにて満重が前に出るしと愁ひ居るにて
言語をも云ず。嘆息して居たり。満重不審その故を問へば夜浪
流涙眼をおしぬぐひて云へりけるは実事にからん若殿常陸に於て
在りける内。無頼の徒を多く召抱へられ平生は側に置寵愛しまし小彼
們素強盗野人なれば。多く不良るを勧めすれば。いかにも驕奢の

心出まひ。早く家を知られじ。公のまうとを行ひまうんと。おぢたくせまくぶ母上の山手島と披露あり。這回鎌倉上りまうひ。湯を運ぶし殿をぐ管領の山前悪るまうし。おて山隠居せきしまうんと。まうはしまうを者のの足を大うを逃者ありて。斯云解をとおてめんざうめど。此うは他より殿へ笑へはめるふりのありてん。山親子の山間を抜んこの方えは此こと仕へふふらまうこれと云も若ひはめるしふ。若殿のいとまうとようと泣くふ。満重縁て茂浪が逃まうより。助手と疎んざうは今又茂浪ぐらふ所ぬ仕へふ判官代助手ぐ鎌倉を連よとこと云ふ。足彼をひめうとふ少しく疑ひの公いでたうど。女子へ純公俄れのなれば云延ぬ能用ひぐ悪うるんと色ぬ云て云ううはいうで我子助手をふもはてさる心めうん相ふくさ行のと云も出ぐと信懲せぐ。茂浪をまうちなうてまうあり。あ且より后何となく。父子の間疎くなり。終ふ判官代助重を別荘に後居をうになりふうり。助重を父の命なれば。やむことなくて別荘に居ると以ど。愛ぬ父に先ひはうやと。安ぬ公もなうりけり。日月関守なく。時既よやうんの春更ふなりふうり。此月母初瀬の祥月なれば。墓に詣佛ふ供養に偽に布絶して懇ふ冥福を祈うれ。さて其祭ふ仕へうる。餅菓ぬうれ物を父ののとふ賜り。母の祀に使へはるのなれば。ちうとしひりうえ。この時父満重い御所ふ居うぐ。茂浪祀の供物をうん公行ぬうくうこび。此月こと七日ぬの昼ひを遂ねと。贈りにうは餅のうちへ蜜ふ沈毒ぬ入れ。

そ知ふねさぬ知て居うりけれ。満重を知とも知ぐ。御所をまうり給母還ふふ茂浪へ迎いれてトうるを。今日吾殿母君の十三回忌を吊ひまひ。其祀に供へ物とて。此ふを勧ぬ。彼菓ふ仕へ満重が

前ふさー亟さう。満重喜ばびつゝ子判官代が孝子ふ今ふそゞあねと
なゝがら。よくも母が苦程の為とて。なるく冥福を営こと孫務なれこそ
其志孝子の仕物なれば。我も食ひく孝子の志孝を受んと。既食ひね
ばうとそれを。萩浪慌忙くおー止めてやひ母う。此報子の此間ねふがう
疑ん再めれ妻昨夜の愛ふろく。且この此使を近ひ抱ら且。
糸の者う拾事はれば。よくまぐ試て食ひ人と強よとぐえるとね条
さることのあゝ此と餅をまふけて食んとするふ。何と母ふん悪き臭
のあれば。こいうあとうちかゝ佛林狗のあり子主の餅をまふ拾て老角するを。已まふ与ふる
とやあり久ひ拾かんて其餅を奈ひ食ひね。満重と狗のとてるふ
あるまじ人を怒りたまふく吃ひ。佛林狗へ畏みられ。あのうち狗
椒の塩ふ迸出。踏居るうしが。悩ーひうねるるがうち俄ふ一声ふく叫び
躍り狂ふとるくーう鮮血濃くと吐き。四足を空さふはして死くる。満重
この光景をえさてふ此餅毒ふ多拾ふいと危しと。且い怒る且い怒り。
我子助重いうるれば。毒あるりのをとりて我ふ送るる。是必ずこれが害
さん為なるる。今日までも彼い孝子と思ひしに。彼る大逆の企をするる
こそ不敵なれいで其義なるぶ。速ふ彼を殺し。不孝の罰を知らせんと。
いきるれあふく罵り法く。人数を集ひ我子ふ対人とふーあれり。こゝふ
田舎平太といふ老儻ありけり。是ふその仏ぞ人直なりしやどふ満重
万ふ代の傅臣となりたるが平太平生ふ萩浪が行状の不良を心うき
ことふ思ひ。折ふふ風諫ーるれが。今日の事ふ。萩浪が做るみとふあるせ
かど。明白なふ拾なるれば。諫あるもせずありしふ。満重怒りふ乗じ。助重ふ

失ふんとあるを知る。怒をさることなどのみ。古殿
助重君の出行跡い人も知らるはず孝子ゆもそとふ。いそで大逆の企なし
のふべくとれあり子細ことそのうあ。一且の怒りゆ。卒忽のるあるべ。
後悔ぞ悔のふこと付ふん。恐るべ。判官代ぞ平生の
美を挙て流るはあぞ。満重も此流をやく少しく怒りゆりられど。
尚疑ひ晴どやめりん。平太ゆ對ひ警害心なれゆもせ毒ある物
を試ものて父ものとく嫁る條。ふとるりの做るきことらん君父疾ある
とれい臣ふるりの。まづ其服薬を嘗といふべ。助重も知りつゆ。
汝目今判官代ものとふ往く。其子細を乳とべしとあるるゆ。平太い
主の怒の少く解らはを喜び。畏りて徑ち別荘ゆ赴く。判官代助重
ゆ封面して。今日の光景ゆ洋なるべ。主の命と偽人るべ。判官代大きゆ

驚れ天ゆ嘆れ地ゆ泣しを幼児の母ゆおとしことくゆて泣涙しそて
哀しみり。平太も倶ゆ泣しる。母あるてやけるゆ。君の孝ゆるをべよく
知りゆ。ゆやはいと畏るるて。我養君万代君れ母上。茂浪とのゆ心
こそ疑ひれるの多り。此人の毒ゆ。命をおとしゆ。何の
詮ゆ人。毒ゆ。ゆを退れ時を待るふこそ。賢きるゆ。
忠ゆも角ゆも君恩なくもそべ。孝の道もたゆゆ。ゆ練ゆ
ゆしまくとそくゆるゆ。助重これを父。斯て我死をりて。罪なれこと
遠るとも。茂浪ゆ恨ゆんかぎりへ父の怒ゆ解ぐしと。平太ゆ對ひ汝ゆ
忠なれ志重。紛さるゆ処ゆ。我一点の害心ゆしと。茂浪厳ゆ
流とかゆ人。父を怒し。我ゆ申生の冤罪を禀さしたりされば死をりて。
父の心ゆ易らんべゆ。汝ゆ諫道理ゆれば。背射死を止りて時の

毒婦の計
父子の間を隔て
藤浪
小栗満重
万寿

変を窺ふべし。汝忠義を励し。寄万千代を賢者とし。小栗の家を嗣
ちべし。これぐ頼と笑へる。平太涙をちらし。小臣が旅を聽めしまふこと
感佩ゆるに処なし。然るうへ。我不肖なりといへど。力弱をし万千代君を
保育奉る。目出度に對面なさしゃさん。甚つゆ深く煩ひあるりな尚
それよりも若殿の此地を立退めふとも必ず幸く去るまひそ。何方
ゆもあれ便の宜に處ふ在せ。さらひるに小臣ゆ二人の男児のゆ故
あって家ゆ居らしめど。今へ下総ゆ居らはしたまれば。彼國ゆ
ゆ。二人を皆孝あって。今回のゆを命受しまるべ。よく仕へまゆらさへ。
さあれ彼ゆをば。君ゆさしくこれ高れまゆしるも計題。
これ弱りて男児ゆよ与へと。一封の書を写めて與へ去るべ助手ゆ。
平太が忠ぶちらは好意を去ちび。其旅ゆまるし。さらばと。常陸より

陪従まりしのゆ暇をとらせ僅ゆ池庄司風間兄弟加後兄弟五人の者ど
召倶し鎌倉をうちたて。平太が教ゆはし。下総國へと赴なね小栗主従の
心裡いうまめくんと推ふふれて情ゆり。且説又田鍋平太が兒どもといくゆ。
兄弟平六郎長秀と云ふを平八郎長為といくゆり。二人とも武義ゆ達。
大力量あるりのゆるが親ゆ仕へて孝なりけり。然るゆ去年の三春の上旬ゆ。
由比が濱の潮干ゆ行ぐやと。兄弟ゆ連ぐちて。鶴が岡の一社華表の邊より。
七里の濱を其ゆ所よと徘徊し。終日貝を拾ひ魚ゆ漁く慰ことまるゆ。
日既ゆ西に斜なくんとゆ。いざや家ゆ帰ゆくんと網を擔ひ竿ゆ携
て。雀が岡の社の側まで還りまるゆ。此地ゆ兄弟が家ゆ平生親しく出入する
酒肆あり。主を三輪七といくり。兄弟の門辺を過るを着てこれを呼び請し
入れ。酒肴を出し食意せば兄弟辞び。主と二人幾杯を傾け。十分ゆ酔る

折ふし俄ふ門辺にて〻〻罵て叫ぶ声とそれば。三人の驚て何ゆへとも知ら
ぬ一人の天狗五郎といひて一色絳秀が下僕なり。一人を小厮こ此天狗
五郎といひ。元来を頼の悪漢あて力量抜捷の達人なり。平生高ふ上り。
下きを軽ずと自在なれば天狗とも異名せり。一色此りのを愛を敬こと。
大ことなりけり。さるに主の權威と己が力をとを負み。日〻市街を
出て。悪口を吠れを做まと酒肆ふ入て飽まで飲ども一回もその價を償ず
来ぬ。若甚價を需ふとれば器皿を投破店をうち毀暴悪擅ふふるを
ど。一色の威を恐れ。これを咎めるりの色。三輪七が家ふも折く来りて酒肉
を食へと終ふ一銭を償ひ〻と色。今日も来りて飽まで飲食して去ん
とと。ちうはよ小厮ハ近日とてふ来るりのかなれば。天狗のことちに酒肉
の價を需ふ。天狗激怒ふ
りのるを。近日のうち天より今浪の罰とあるべし。其時酒肆を償ふと
云はく。支退ハとそれふ小厮ハ嘲弄せ〻ふを懐り前後のことを顧こ
いきまいて罵りるハ汝妄なる漫言りて我を欺く天より宝ふ罰
まるべし。汝ふ来ふを行ん酒の價ハ明日を云ふを既よ今呑〻ふ
や。今日銭ふ〻ハ衣服ふても脱て去とのりふ〻ふ天狗大ふ怒り〻
此年頃都鄙を横行して多くれ酒肆をるりて酒を呑ども一回も衣服
を解ふ。汝の價ハ償ひ〻ふ。汝我衣服ふ〻ふ脱ることを〻ふ
敢ハ小厮ハ〻〻〻怒り。我ふ〻ふ汝ら衣服を脱ぐ〻と近ふ近来る而を
天狗拳を振うふ。小厮ハ眉を顰〻ふ打〻〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ
なるべ勿ち手地ふ倒れ鼻口より鮮血流れ出て苦〻と叫びまり。
三輪七これを看て慌忙く天狗を抱へ此小厮近日石抱へ

られば。只下と看郷ふば。無礼の言を吐て。怒らせなゝせぬこのこゝを
狂てゆるし給へと泣ぶれば。天狗は尚威猛なり。汝が云はゝるとゞの悪さ
に我は恥辱を与へさしよう。後の懲しめ忘れと。三郎七を捉へて散ゝふ
打擲を。三郎七は大力ゆ捉へられ。些も働くこと能はゞ只うゝまゝ撃れ
声を揚ゝ泣叫ぶ田舎武士これを看て天狗が暴悪なる行状を悪こと
ゞ怒りを発し。兄の平六郎矢寄て天狗が振上られ拳を捉へ引ぶふ
まゝ五六間投退三郎七を助け起せば。天狗大きゆ怒り起上て。腰刀を
抜して。平六郎に斬てかゝれば。身の平八郎此絆を見るより傍ゆ有り
合ふ酒瓶を取て投付ゆ瓶が頭ゆ打ぶつられば。砕るれつゝも
瓶を取ゝと。向ゆる所を。平八郎は勢ひよまろし。指を取て散ゝゆ撃
合ふ。急所ゆ中て。倒れ行ぶ。其ゆ息絶て失ぬ
けりとゝふ。あんて三郎七大きゝよ驚られ。田舎武士ゆ対ひこの天狗五郎と
いふ。南村接威ある一色絃秀の下僕なれば。厳ゝ此出来ぬん何まれ
我が人殺の罪は逃れ難し。常言ふ。三十六計走るを上とゝとゝ言ふ。
これより直に某が生国下総の結城へ走り。伴ひ来んとあれゆ。
兄弟は罪に伏して死んこと厭ふ。親は先ゞん不孝を患ひ。三郎七
が勧めゆ。しけ是ば。三郎七は貯へられ金銀を懐ゆ。兄弟の人と緒
ともに俄ゆ家をもの出。その日のうちゆ鎌倉へ去れど。
追人のかゝらんこと。夜行昼止まんで。忍び〳〵下りゆ。彼ゆ〳〵
結城に至り着ぬ。三郎七は早ぐ血属のもとゆ行て。如斯〳〵のこと
告げの上れて。彼方みられば。甲斐〳〵しく三人を占怯不発。鎌倉の
音耗を窺ふゆ。鎌倉ゆ〳〵。三人の行方を捜索こと頻なゆ

笑とさゝとゞふ此國よりでゝ索め往ば。三人心を易ふ。田鍋兄弟の祝の
りと人此地方ゆ居るよしと告知らせさて生産のことゆ議るゝよ三輪七
少くゝ貯めれば足を本物とし。仕物酒肆を出。三人力を合生業
ふ息ゝざりしゝ。三人の口糊とゝるふ易く。志ゞく此地ゆ忍居る。

第八編

両雄を市ふ得て因縁全し
一老城に死し〳〵奸邪誇ふ

抑此結城とゝふ地方ハ。絹紬を織をりて平生の生産とゝれば。諸國より
高人とゝに集ひ甚織ふの絹を買へば。旅客の絶間なく。土地自らら
富饒して青樓酒肆軒を並べゝ。その繁栄わとく。京瀑会ふ及
けり一切めゝば一失ありと。邪物舎る地なれば其民自ら驕侠客多く。
闘爭日ゝ止ふして民の煩多ゝ絶ふ三輪七ゝふ酒肆を出し。
侠客ふ日毎ふ集り酒肉を飲食ひ。果ハ闘爭ふ仕出ゝ田鍋兄弟
素より力量抜捷の少年なれば。其兄制し止めふ一回も不ゝとゝ
ことゆ此ゆ驕ゝに笑へゝ行ふ。此土地ゆ脆ぶゝとる侠客ふ彼ふ兄
弟を慢ぶしとゝれを恐ゝ。三輪七ぶりとあてハいゝ行れ人も酒肆とふ
りの色后ゝふ田鍋兄弟ふ武藝を慕ひ。その枝藝学ぶんゝと欲ゝふ。
素より好る道なれば。相撲太刀合の業を教けるが。漸ゝふ学ぶゝの
多く後ゆハ結城中の任侠ハ皆田鍋兄弟の弟子となりけり。一日田鍋
の弟子ふ六七人。街を往来し。酒肆ふ過りて乱酔ふ及び。再び街ふ出ゝ
傍若無人ふ。倍り歩ゝ行ふ。由緒ありげなる武士の。六人打連立ゝれ
旅客の西より東をさして来るのあ足が。間なく酔狂の侠客ふ行逢
り。侠客ふハ砕ふ乗じ。此旅人を通さじと。往還ふ立ふさゞり。多ゝに

悪口をきけバ旅人憤り既に及バんとする。其時旅客の中に老実やう
なる二人のもの人々を制し侠客に對ひ。これハ徳念方のものなりこの
地方に尋ぬべき人ありて尋来るものなり。其所を許し通したまへといへバ。
侠客ハうち笑ひ徳念人といへバ。他国にてハ恐れて通しもせつらん此地方
にありてハ管領執るものにても。あらせ空しくハ通さじ。強て通らんとならバ。
我々が股を潜りて通りゆくべしと欺されバ旅客ハ大きに怒り汝ハ土民の
身として武士に對ひ悪言なれをなすこと緩急も逸に通さバ子細なし尚
支ゆるとならバ一々投殺して通るべしといひけれバ。これ面白し。いざ投
らるべしと進み寄る旅客ハ一般に心得たりといひさま勢ひ猛れ侠客を
とつてハ投捉へてハ投たること。幼童の戯に手玉をとるがごとく。三四回
まで投されバ侠客等ハ初の勢ひなきが如くにもちなれど恐れ戦き逃んと
すれど。あまりに強く投られしかバ。足も起ず只蹲まりて居たりけれバ街
にて此体を見たる往来の人々ハ。喧嘩よと西より東より走
きたりて侠客が常々こそ誇れる此処に走せ来たるもの。さながら百人
に及び。朋友の仇を報んと旅客をとり囲逃さじとぞひしめきける旅人
ハ此光景を見て寡ハ衆に敵しがたし。今ハ逃れ処となし。極めて其
所へ声を高かにし人々しばらく。旅客ハ我救をなしたる方なりと
呼わりて大勢の侠客を制し出来る二人の大男子ありて旅客の前に
跪き低頭してかしけ。君ハ正しく判官代助重にて在ざるや。斯申す
ものを忘れ給はしか。某ハ田鍋平太が男児にて平六郎平八郎と申し
兄弟のものに候。是までのものハ渾て我々が弟子なれバ君とも知らず
無礼を做せしと覚へハ。これハ知らざる上ハ其科を免しあられとゆへなりけり。

小栗助重
結城小
田辺兄弟
遣小
酒
小栗助重
冠間兄弟
美濃太郎
後藤兄弟

旅客のうち貴き人なれ人不審しおりちゆて田鍋兄弟着一着て大ふ
驚れた我とるのうち助重なり。汝ハ田鍋兄弟みくあり之れよ我汝をゝぶゝて
此処ゝ来れり。此危きを逢十分れ難よ及び一代。よくも故ひ引とこう。汝
ハ弟子ホゞ無礼を素我をこんゝ〜ざれゞ。何う若一かゞ代とありゝ
田鍋兄弟斜ゝ〜ゞ去び任侠ハ對ひ。汝ホ此よ来ん〜て只今の罪を謝一
をきとあるに。みれ一般ハ手服一て罪を謝一ゝ。そも
若殿仇等のゝれもとしていとゆゝ〜し江光景ゆて我ゝをゞ尋させ
のふとゝ人ゞ。ゝれゞとよ此ゆふふゝて手細ゆゝ。路次ゆ一てみゞゝゆハ述
かゞとのゝふゝゞゝらゞゝん若とも小臣ゞ敬屋よ入ゝしのゝと案内ゝ。
三輪七ゞ酒樓ハ誘一〜三輪七ハ斯と告ゝれゞ大きゆ驚ゝた酒肴を出て
饗應ゝ。其村小栗ゝ伝五人の人ゝハ田鍋平をゞ練ゆしとゞ。詳ハ後述
近く来た父の不奥を蒙りしこと田鍋平をゞ練ゆしとゞ。詳ハ後述
平太ゞゆ間を与ゝれゞ。兄弟ゆ一戴き披きゝんさて中ゝゆう。去る年
系く兄弟天狗五郎を害一。湯殿の任居なりゞく。此地方ハ下りて
ゝゆ五年ハ及べり。其間君よ遠ざゝり居ゝれゞ既よゝ忘れなつるを
幸ひを好ゝく思ひ出一。ゝゝハ誘一ゝ。我ゝゞ歌び
此上ゆ此ゆを好ゝ一ゝゝゞ。ゝゝハ止りましょせと忠ゆゝよ笑へゞ。
あるより三輪七と謀り。甲斐ゞしくゞかゞきゝ陰ゝ雖ゝゝゝの田鍋
兄弟。是ゆ引ゝ新田の臣ゝ再生ゝ。前ハ池庄司ゝ得ゝゝを首と今
田鍋兄弟ハ至ゝて渾て十人前世の因縁をゝゝゆ金ゝゝ。ゝゝ十一人
の徒君臣の義を守ゞゝ。ゝゝゝ苦難ゝ経ゝゝ。往ゝゝ解を清て知りゆ。
さて小栗助重ハ父の勘氣を禀。此地方ハ左遷ゝゝ。常陸ゝ乱ハ

云ひ終りて、人々大きに驚くる中にも、義登小左衛門、後園に出でて泣く泣く。君と親苦を倶にせざる。臣の道なめりと。不日に結城に赴き、互に憂を語りあひ、足より十人忠を尽して助重に仕へ、主の恥辱の無念を頻へひ。其時をこそ待ちけれ。不在話下再説。鎌倉にては小栗孫次郎満重、一時の怒りに乗じ助重を逐ひたるが、中々日月を経るに、さぐし。其日次のみ出し。漫に愛恤くいと不便に思ひ。彼は素より孝子なりしに。いかなれば我を害せんとは為ぬる中々。こを必ず故ありねばぞ。その事を問ひ明らめず一旦の怒りに返失ひしは我誤なり。後悔の事頻なり。それ門人義浪はおのれが謀叛なれば。限りなく喜びねれと。助重を殺さばを。本意なりとぞ想ひ。いかにもし満重の怒りを慕ひ助重が行方を尋ねて害ずるとも。と又を言ひ合れと。満重さぶる聴ど。義浪を疑ふ計り者人々あれば斯ては悪しと。暫時其事を止まりぬ。

こゝに先年朽氏公よ亡きまし。家枝入道禅秀が子ふ家枝宮内大輔憲秋同舎弟治部少輔教朝といふものあり。父亡びて后は京に上り。将軍家に仕へ奉りしが。父の仇を報いんとて心頻なれど。時至らざれば空しく日月を送りけるふ。近比持氏公の行跡いと驕ふせるに。京都の将軍家へ対し。私のみ多りしが。将軍義持公憤り給ひ。内々鎌倉を亡さんとぞ。たちまちしるし。世の中穏ぬ。危ぶこと色も出し。家枝兄弟は密に父の仇を報んとて。嘆て云ひ。将軍家に許容ぬ。我へ知らざるよしにて。汝が父の雄名を報ふと称し。兄弟は戈を執ふ。我も角も計らふ。ぞ〜と仰せ下さまし。憲秋教朝大きに喜び。一族家人を集めて。力同心の。既に一千二百騎に及びぬ。斯てこの宿志を遂げんとぞ。

伊豆の三島まで攻下りしが、鎌倉より度々召れ、此家人どら一さうえも
支度渾妻子を引倶して、まく〳〵逃去りぬ。なほそのふるにつりのもなく、終に
相州まで乱入し、在〳〵下〳〵迄向ひ代官は家人を捕へて首を切掛しうど。
いろなる体故なや。拓氏公は空部ぶれ新しておしろう家扶只今は尚遠念
まで責入んと考られど、僅なる勢のうへ、且内意の無力なりけるとて。
さてこそ議会へ入がら、再び京都へ上りけり。此家扶只今の小栗
この家扶 左馬以拓氏公を京都打軍家を扶只今として我とうぐべ
なりふとあぶ〳〵憤をふくみ終に這回を我りして付人と甚順依るらふて。
戎器を集め軍兵を調練し、今ゆも軍を生とぐれ申うるしぐ。孰る家扶
憲実大りを強る拓氏公を屢諫めなれど。さらく聴入なりど。かくて
小栗編者曰、拓氏軍馬調練の事紙余に小栗信扶郎記に詳
大りを強る拓氏公を向ひ命畏りぬ。けれど今天下昇平にして兵を逐ふ
の時よりあぶ〳〵再び知る中きまひ。此事京都打軍の伝聞ふらぐ。
京都源会忽ら呉越の仇間となり侍ら人再ると仇は先祖への不孝世
の嘆きとなりのひうえよ。大なく此事あぶ〳〵止まぐせ〳〵手人と諫まるべ。
拓氏公大りを憤らせまひ。汝い者絶の武士と思ひ一大事と命せ」
麒麟も老ぬれば駑馬に劣るとは。此人嗚呼臆病未練の白痴かな。
さ年うの人ぶいうで此てを任さべ。とくまうり稼と宜ひつ慢内ぶく
入らふふ良ぶにも若く。忠言耳よ逆ふと常言のごく。小栗い君と諫
く。不良を歩りとこぐとして所をまうり。是より引籠りて潔こ居
りこれや正ふ小栗が家の断絶とぐれ時の至りるめや。後悔ふ思議の
深と没け中〳〵甚ぐ中によりて猛き君の仇不審を蒙り。終に征伐せられ

かねてこそ方見られ浪々の助重を失はん謀にて人をして云はしむるは小栗
判官代助重こそ父の御意を蒙り家を追退し憤りに堪へず父に仇
せんと近比無頼子に身を紛らし鎌倉中を放火し其罪を父に帰せんと
なせしと云觸さしめければ満重は引篭居れば此る事夢だにも知らずと有けるを
かゝる持氏公の御咎に入り。深く憤らせ給ひ満重はおのれが子の鎌倉を
騒さんとせしをも知らざりし如何と覚て居るぞ甚志氣深と疑ひ給ふ処
なるへし例の一色淫秀この御意を伺ひ此時こそ小栗を亡さんと思ひて
持氏公の御前に出て云やう実になるべし小栗満重前日君の御不興を
蒙りしを憤り我子助重に鎌倉を騒さし其まぎれに乗じ君を傾け
まゐらせんと内々京都の命を蒙るよしなりと讒しければ持氏公
兼て小栗を疑ひ給ふ折なれば一色が讒を実と思召し急ぎ討手を催さる
輩は詮議もなく小栗を討たまはんと俄に兵を集ひ給ふに執事上杉
憲実これを聞て大に驚き例の一色が讒を信じ給ひ斯は召しなさるまじ
なくんと急ぎ御所に参り多く諫ますれど持氏公御聴とげもなく
御怒りを募らしめ給へば憲実力なく家に還り蜜に小栗が方へ子の
由を告知らせければ満重大に驚き謂れなき事を御所にまゐり陳じ
申さんとありけるを田鍋平太諫めけるは持氏公の御光景を伺ふに一色
淫秀の讒を信用し給へば。いかに陳じ申すともいかで御許容のあるべきや
寃罪に御命を没し給はんより早く本国に下りたまひ時の至るを待て
執るにはひて御謝なされ旨を云解き給はゞ君の不明を悟らせ給ひ且小栗の御
家全からんとぞ勧めければ満重も実も道理なりとて其より俄に
本国常陸なる田氣の城に逃下りぬ。此時は是應永三十年五月のことなり。

持氏公此由を聞し召大きに怒らせまゐ急ぎ征伐とべしと一色注秀に一千五百餘騎を添て常陸國に下しまゐ小栗満重伊人竹人今は注秀に対し恐ある一色が為ふ擒となるくんそせ一念のうらめしく一軍して死ぬるものを知らさるやと頓て龍城の淮侯をかしたりこゝに小栗判官代助重は父満重君の仇不審を蒙り田氣の城を竜城をとゆきはまは本十人の侍臣を將て田氣の城よりち越前の勢を免され俱に籠城せんと欲す池の庄平田漏平太ふたりて父満重に嘆くる満重も今は助重を逐しを悔し対面してやらんと我先途を見届んと竜城を望むと健まふも嘆しれそもく這回扨氏の仇不審を蒙りしはせんさに処汝鎌倉を騒動ささとしの流言より起まり然る今汝を此城に竜城させば流言いよく實となりて不忠不義の名と後世に残さんは如何

之念なるものにあらずや此道理をよくよくこゝに思ひ止れ否しさて此回の事は一色注秀が我家を亡し亦須を奪ふんとする逸せしと見えるなり且君の仇行状をこゝろふ今故なれば軍馬を調練さし戒器を集めるこれむそくに京都と傾けるらんもはしたちまち其ゝ日前日我に命じのひしほどふよ時帝なりと強く練めたりしふ乱氣を抜ぶ絶ふ一色擅所の外とふ誰もよく知なれば忍び居て我討死と笑えるべ仇とし思ふ一色と討亡して家の名を再び故に覆さんは実の孝なるぞと涙ぐらふ嘆くる助重これを笑中より涙を呑こらしが中あらく云出るは君の涙きは一色が涙を奸悪なれ共くふ云念あらく是彼のてこぐも此命を乗れ

仕ん孫ど子として父の死んとさるをしらでうでんとして去ふはざき不臣
不孝の名を負とも天日のまぐ地に隕ぶいつう究罪は明うふ旅行
ことも仕らんふ籠城のことは兄めれ家名を建るハ第の万千代ちゃ
無りそんと中ス仕満重俄に氣を移し我一旦ふ奥迄子ふ断にくるも
對面をるハ郎等の手前も恥はことなぐふ家名を遺さんみなれわ
を道理と仕とろ仕ぐく子として父の命を聴ざこれが不孝はあぐまろ
さる白痴ぬいで我子ふ為ぬ助重よ親子の縁もこれ限りらど
去給と退去ス紙門の裡ふ入よろ助重悲しさゆるうるく熟おりへば
去頃父の勘氣を蒙りて結城の里に潜り居憂日月を送りつ父ふ
對面せんことぬ神や佛ふ祈りしふ甚甲斐ありて今日只今父ふ見ゆは
[illegible]

做んとぬ嗚呼無端世の中やと涙よくく贅言ハ道理ゆもまと慄なり。
池庄平田鍋平太ハ前刻より此所ふ在て首尾の光景を父居ぐらの附
二人齋しく云りけれぬ嘆ぬハさることなぐら大殿の心君を悪しと
おぐとゆめふぐ後裔なれとと嘆うをまひつぐと怒ふせうふなり其
ハ志ふと云よちまつぐ果しのふぐハ孝ふく父母没と雖善をるきん
としてハ父母の名ぬ貶んことを思ふて必ず果をと内則ゆもいぐや。
我こも君とともに大殿の心志を續んとハ存ぬれとよる年波の身の
うぬ果さぐ社間ふ亡人の数よ入くんハ必定るれぬ今潔く大殿の死出れ
ハ供と共悟せり。跡ふ遺せる男児ふを我こもみそるハ。石仕ひ
ぬ父冥加ゆのるハ恩く今世の頼ひれごと。信心ふくく頼へさる
助重ハ父の命とハ。且ハ二人が訴ふ。注をぐるくて肯へぬ二人ハ深く

感謝をのべ斯くの主家なれども我々の後裔まで遺念はいざさらば此後は長居は妨多し。とく〳〵下城し給へと催促されば助重は公儀〳〵泣くも田氣の城をまもるべきぞ。十人の従者は待うけて城中の首尾如何。助重のりし車どもを詳みゆえ乗ぶとさてはもうは子としく又乃家期をよろこぶよろこんべいと忍びざる事なり。敵寄ぶ小勢なりとも後詰して追拂んと思ふ。汝ホ我力を助けなんやとのりまろふ。渾一般ホ。いざ艱苦を君と倶ホせざるべんといふ。助重も喜び。さらば便宜の所よ忍び居るべしと従臣の輩と城より二里ばかりも隔る山林ホ。主従十一人身を潜て伺ひ居れり。不在話下且説鎌倉の信頼北条氏小栗満重を征伐せんと一色詮秀を大将とし一千五百餘騎の軍兵を差向ける。

[illegible]

く寄手の大将は一色詮秀とぞ聞えける。足利我怨ある人なりいまさその伝なりを追散し。めとよろこん詮秀は討取るべしと。是兵三百余騎をもて池庄平次は先ず進むて出でるを。案内を差はせ寄手の伏勢ぞ。

先陣一度もまべと乱れたりし。本陣ホなぐれかゝるべ。本陣も倶崩れて敵こゝ敗北し遠く逃去りしかば池庄平士卒ホ下知し。吾拙武具取奪ひ。城中に還りぬ。寄手初度の戦に利を失ひ。大きな氣臆れて城を攻んの義勢なく。遠く退ひて陣をとりぬ。城中よりこれを伺ひ。夜く思ひて斯て我ぞんこと不覚ぶけれど。固く守りて出合ざりしにもあらで城中よりハ或ハ朝ごと。夜討をとさるホ。一度も勝ざとのつとる。寄手もまた〳〵懼れ斯てハ始終覚束なしと。鎌倉へ斯こと注進をなふ。持氏公ハ〳〵近国の悪徒ホこれを左祖せバ由〳〵ハ大事に及ぶべし。いざ我自ら走向ひ

一付け責はるさんと俄に鎧を着て出馬し給ひ多氣の城に籠る。小栗は主に弓を引くことを恐れ、これより城を出て遠近寄手城責さるべきよし防ぎ戦ひ落ぶべきとも人々ざりけり。持氏は大いに怒り、士卒を下知し自らも先ず進む。既に堀隈まで馬を乗り寄せ、その時大手の門に櫓を開き小栗孫次郎満重赤地の錦の直垂に紺糸縅の鎧着て、扇を揚げ持氏を招き高々と申されけるは、満重足より下に君へ申さんは礼なく畏れ、止まるべきにあらず。小臣君に対し奉り聊野心をさし挟むことなく、既に事ありて及ぶべき小臣背き奉らば證拠出馬の上、我が戦を催すべき。君は弓を引き給ふ仏なり。そもそも君は實に仁政道も正しかりしに一色の悪意を懸け給ひ、ならびに恭しく礼を乱し、武器を集め、戦を企てこと。何の所為ぞや。想ふに京都の軍家を傾けまゐらん結搦なりん足臣と為て君を弑するの大逆なり。いざ天道の恵護めんより勢ひに乗じ、四本意を遂げんとも反逆の名を逃れ難し。小臣此を嘆き諫めん死を以て臣下の常なり。心を裂き比干に及ばぬまでも諫めん眼を東門に懸られ、伍子胥が身となりけり。今は自殺して憤を晴けんと小臣こそ悪しきものとも城中にあるものとも不便と思ひ命を助けんといふとも鎧を脱ぎ、法祖き水なき短刀を左の脇に突き立て、右へきりと引き切せば殿の立ち給ひ池庄平主の首を打落し、刀を投げ捨て、俯ふなんて失ひ、此南付城中俄に火發り、焔々として焼あれば、此中の男女擬手の門より逃れ出れば、一色治秀の方を

多気落城
蘇浪万
千代を
待て城
を逃る
蘇浪
万千代

討んとせしを持氏は小栗が最期の頼みなり。叶へ給まじと制しゝ給へば。城中のもの孫子逃げんこと欲ぶるに。此時妻子も方々を代を倶し城を遁れ甚行衛知らざりね田鍋平太を城中に止て自殺せしとぞ。小栗判官代助重は田舎城の後詰せんと山林を分け駆しゝ奔る。

まゆうら待つしに天よふ測の雲両めれば人ふ不意病おろ〳〵。此角付助重風のこゝちして〳〵重々なりゆひて終に人を知ぬまで加ひしゝ。十人の侍臣ふ大ふ驚き。介保おろ〳〵と云ぐ。

齊國へ小栗征伐の軍陣よりて。此地方の民四方に散乱し。醫師なんどのあることを。知て耕耘せぎは稲粱のごゝ。たゝ命ふ惜ふくとも。速ふ本服せんと。人〳〵相議結城へ近ぶ住

結城ふ使ひ人ふ。此所三輪七の既ふ没命つれと田鍋兄弟の武義の女子多くりしほどふ此人〳〵の情よりて想ふまゝに治療を做ふ二月ばかりを経て漸々快くなりね十人の侍臣ふ喜んでいざらば田舎城の後詰めせんと人数を揃ふうちに。田氣を落城。満重生害ふ聞えれば今を所ば後詰せんと。助重ぶ嘆きいさらめも云ふど。十人の侍臣ふ。

殺を亡ひ妻子を殺しぬれば。悲しゝ憤ると限りなし。此うへは一色

経秀ふ討てこの怨を晴さべしと一色が音純を笑ふ。兵湯合ふ。思ひ

ねとありしが。此上ふ湯合ふ至り仇を報んとて。従十人いとこ〳〵やうふ

旅発て後金〳〵とて執ゝ〳〵ふ。蘭れども小栗助重ふ。持氏をのすゝまうこ

〳〵て満重が子なれば。明白ふ鎌倉へ入ることを。一殺く。相模國權現

堂村といふ旅宿を。留め。時此所ふ滞留して。一色が行状を伺ふ。

淦秀常陸より還りて后。君のはおぐらえまうでよく。小栗が舊館さへ賜り。甚恭しく別莊とる。日毎に行き。遊宴の所とこそ思へ。小栗大いに憤り。所時も早く彼を紂。重る怨を晴さんと。主從十一人相現堂村をこち支直に鎌倉に行んとせしが。世況悍多く人の大いなる。を思ひ。なんと此地方より鎌倉へゆく。山越の困道あれば。ここより忘び行人と其道を捜索て急いでゆかば。あと八人里に出て山路なれば道況同じく人家もなく。少き山樵牧童のみ遭のみなれば。たとひ人家ありとも。ここを右に混り。西に攀べて北に上りゐるべし。俺は五六里ばかりなる行程を朝より夕に至るまでたどりしかども。一の人家にいたり着ぬ。こゝより禁の方とこそ下せば。大きなる壯院あり。そこ近七八十軒の小家あり。小栗問ひ況は神の祈禱に近ぢきに。今夜ひとの禁に宿を借りたやと。嶺を下りて人家在所に至りしに。數十人こゝに一乘の女輿ひとり囲こと。大道狹しと通り兼ねる。小栗主從これを見て。是は此地方の地頭。代官なんどの妻の女児の往来とぞ。皆笠を傾け道の傍に寄て通りること。先導の下僕ども況に憤り。汝ら何者なれば我姫君の通りるに笠を取ざるとこそ勢の下僕共かくの如くに人くの笠をかひとり捨てり。十人の勇士等大きに怒り。我らは化國のものなれば此地のことは況知ぬ。然るに如斯狼藉に及ぶ。でう奇怪しとひきまくると。小栗制し止めてこれを宥めば。下僕等を小栗が宥るに乘じ。尚悪言を出して恥じ。勇士に堪へかねて。そもとく事に及んとて其府輿の裡より。傍にありて侍女として。下僕に向を制さ。さて小栗に云ひ。目今下僕ども況に怒ーあれ。

旅人ゐ向ひ給ふとめれば。今夜ハ我家ゐ宿りゐひゐんやとわり
けるゐ小栗さらぶに幼年ざれど。只今ゐ生身ゐんとこそ。さるのごと
のきなくぶに。今夜の宿をさ人借んとあれば。其いふるまひ。侍女ゐ殿ゐ
たもひく借れ行よ。前ゐふ領より。こうし壮院の前ゐ生ねそ。その巌重
なること城のごとし。彼妻ハ此壮院の裏ゐ掛入こうり。侍女も續こと小栗
主従を伴ひ入一軒の別館ゐ請こうり。小栗を従いと不審こうり。何人の
館ゐて。妻中の婦人ハ何等の人ぞやと各只これ夢のごく又酔ほ
ぶらく。恍惚として居こうける。